

身体という檻 [改訂版] 2.0

— コミュニケーション論／自我論的にみたダイエットあるいは摂食障害 —

芦 川 晋

(付記) 改稿版の上梓に当たって

さて、なぜ今さらこの論文の改訂版 2.0 を公表するのか？実は、改稿版のオリジナル原稿の完成は第一版の公表よりも早い。要するに原稿の書き直しが締め切りに間に合わなかったのである。そこで、友人等に抜き刷りを配るときはあわせてこの改稿版を配るという奇妙なことをやっていた。そしたら、どこでききつけてきたのか、この改稿版を所望する人が若干名現れた。

また、この間に浅野の他にも聞き取りをベースにした摂食障害の本が公刊された。元々、本論文はオリジナル版とは導入も結論も大幅に異なっており、さらに新しい知見を加味して書き直せば、紀要レベルの論文としては別の論文扱いを受けてもよいであろう。そこで、ここにオリジナル版を廃し改稿版を上梓することとする。

0, はじめに

私が本稿で摂食障害を取り上げ、考えてみたいことは大きく言って二つある。一つは、ダイエットや摂食障害を自我論やコミュニケーション論の観点から捉えていくとどのようなことが言えるのか？ダイエットが可能にするコミュニケーション戦略とそれがもたらす摂食障害という「いびつな」自己の形を理論的に考察してみたい。

心理学や医学系の議論で、摂食障害は主として親子関係（あるいは「重要な他者」との関係）に還元して語られている。たとえば、ママが喜ぶからご飯をちゃんと食べる。こうした子どもの一挙一動が母の情動と結びつけられている母子関係で、一見すると、母の愛に満たされた望ましい状態に見えるかもしれない。

しかし、こうした母子関係は転倒したものと言わざるをえない。というのも、言うまでもあるまいが、食とはそもそも子ども自身のために必要とされるものであって、そこに母が介入する余地はないはずである。ところが、ここでは食を動機づける資源として母への欲望が利用されている。ほんらい自分にとって大切なニーズである食が、自分の母を満足させる手段と化す。逆にいえば、自分を愛するが故に食べさせているはずの母親が、ここでは自己満足のために子どもに食事を与えていることになる。

こうした動機づけのもとでは、子どもは自己の欲望を母の欲望から独立したものとして把握することが難しくなる一方、食に条件付けられた母の愛ももはや疑問の余地なきものとしては受け止められなくなってくる。いわば、子どもは母の過剰な愛情のなかで愛情から疎外される。

ここでは、食が母(へ)の愛を確認する結節点に位置することになるろう。母の愛が疑問に感じられるのであれば、食を拒絶してそれにたいする母の態度をみればよいのである。このとき、食とは、母子それぞれが互いをコントロールする資源と化す。愛は、食を介してのみ、それも、自分が相手にたいして優位にたつときにしか感じられなくなる（娘が食事をしてくれた、拒食する私をみて母が心配している等々）

とりわけ、女性は「自己の欲求を他者の欲求に従属させる」ことを役割としてきた。たとえば、子育て。しかし、子育てはもはや女の仕事と自明視するわけにもいくまい。ところが、自分の性役割に十分同一化できていない母親は、みてきたように、しばしば「他者の欲求を自己の欲求に従属させ」てしまう。こうしたアンビヴァレントな態度に接して娘の方もダブルバインド状況ひきついで、自分が同一化すべき役割を固定できないまま

周囲にあわせて期待される役割を演じていくようになる、というわけである。

たしかに、治療的な観点からすればそれで十分なのかもしれない。だが、いまや摂食障害の主たる誘因となっているダイエットは、痩せることで彼氏ができた等々、ダイエットする身体を介して自分が他者からより好意的に受け入れられたいといったことと結びつけて語られることが多い。このとき身体は、他者と自己を結びつける迂回路の役割を果たしている。つまり、ダイエットは痩せることを通じて他者との関係を良好なものにしていこうとする一個のコミュニケーション戦略なのである。

E・ゴッフマンやJ・P・サルトルを引くまでもなく、自己とは対他存在であり他者との関係のなかで自分が何者かが決まってくる。とするなら、ダイエットする身体に依存したコミュニケーションは、他者との関わり方および対他存在としての自己のあり方にも変化をおよぼすといってよい。ここでは、摂食障害が、身体を迂回路とした結果、かえって自己と他者との距離を拡大させてしまい、自己を身体の内側へと幽閉していく逆説的な帰結を記述してみよう。

摂食障害の増加に結びつく女性をとりまく社会的状況はどのようなものであったのか、またあるのか？2002年に行われた厚生労働省研究班（代表 渡辺久子）の全国調査「思春期やせ症の実態把握及び対策に関する研究」によると、思春期やせ症の発症率は中学三年女子で0.45%、高校三年女子では2.3%、その予備軍とみられる「不健康やせ」は中三5.5%、高三13.2%と（2003年6月19日『中日新聞』夕刊）、その増加と低年齢化が指摘されている。学生の話聞いていても、一頃オウム真理教徒について言われたように、友達の友達レベルに摂食障害の子がいるといった声が、毎年ゼミ生の一人や二人から聴こえてくるのは珍しいことではなかった（時として、本人がそうだったという場合もある）。

先に述べたように、浅野の本の元になるインタビューが行われたのが1992年であり、この間に10年以上の月日が流れている。しかし、この歳

月を埋めてくれるようなフィールドワークの成果はまだ出ていないようである。もちろん、私もこれを埋めることができるわけではないが、近年の状況を考えるための枠組みを提供してみたい。浅野がインタビューから引き出した結論は、「自分らしさ」と「女らしさ」の相克が女性の主体化を困難に陥れているというものであった。しかし、バブル経済の崩壊以降、かつてのような「自分らしさ」の追求はどんどん小振りなものになっている。だからといって、摂食障害者の数が減っているというわけではないようだ。近年、東浩紀の「動物化」の議論に見られるように、主体化の作用そのものがうまく働かない社会状況の広がり指摘されている。私見によれば、「自分らしさ」と「女らしさ」の相克とはこうした流れの一局面として現れてきたものであり、その背後には主体化そのものを無用にしていくような社会状況の到来があげられるように思われる。

そこで、本稿は以下のような構成を採ることにする。まず1節では心理学・医学系でとりあげられている摂食障害の説明を概観し、そこから読みとれるおおよその傾向を敷衍する。2節では、ダイエットおよび摂食障害をコミュニケーション論／自我論的にみるとどのような説明が可能になるのか、理論的な見取り図を描いてみる。最後に以上の議論を参考にしながら、3節では摂食障害が増大してくる80年代以降に女性はどういう状況におかれ、その帰結がどのような事態を招いているのか一つの仮説を提示してみたい。

1. 内部指向から他者指向へー嘔吐型拒食症をどうみるか

いわゆる摂食障害（神経性無食欲症および神経性大食症）は主として青年期の女性に発症する「病気」であり、その起源をたどれば300年ほどさかのぼることもできるが（R. モートン）、19c 後半に英仏で注目され始め（ガル、ラセーグ、シャルコー）その頃の患者の大半は上層階級の女性であった（1）。しかし、実際にこうした症状が先進国で増大し医学的な関心を引くようになるのはおおよそ1960年代に入ってからである。日本で言

えば「黄金の60年代」と言われた戦後の興隆期にあたり（梶山進、石川清、下坂幸三）、いわば消費社会化のとば口にあたっていた時期でもある(2)。その後、日本では80年代に急増したと言われ、90年代になってマス・メディアでも頻繁に取り上げられるようになった。浅野はこの時期に摂食障害が医学的な議論から社会問題化していった、わけても女性問題として取り上げられるようになったのだと指摘している。

神経性無食欲症の診断基準の項目としては以下のようなものが挙げられており（DSM-IV）、

1. 体重が低くても存在する肥満への極端な恐れ
2. 自分の体重、サイズ、体型の受け取り方への障害
3. 年齢、身長に応じた正常体重の下限以上の体重になることの拒否（期待される体重より15%以上減少）。
4. 月経の停止、

ほかにも顕著な身体的あるいは知的な過活動性、規則的な食事を避ける等々行動が見られるという。

摂食障害は、とりわけかつては、しばしば成熟した女性になることへの拒否として説明されることが多く、またそれが特定の価値観を前提していると、フェミニストから批判されることにもなった。この点で、下坂幸三[1999]は、患者が男子を羨望したり成人世界の表裏性や性的関心を非難するような成熟拒否型の摂食障害が次第に見られなくなり、むしろ個性追求型とでもいうべき摂食障害が増加してきたことを指摘している。「今日の彼女らは女性であることをまず嫌悪しないが、しかし並の女性になることを極度に嫌い、おそれる。目下の自分についてもまた、並であること、他者から並とみなされることに耐えられない」。「自分は他人から一色違った形でぬきんでていなければならぬ。それは内面的充実などというものではなく、自他とも容易に認め得るものでなければならぬ。可視的なものでなければならぬ」(125頁)。さらには、「美の追求をはっきり口にする」[69頁]。「享樂的に、利根的に現実生活に耽溺していく」(70頁)と

も言われている。

その一方で、古典的な拒食症よりも過食を伴った摂食障害が増えていることも指摘されている。「神経性無食欲症がポピュラーになるにつれて、その出自は普遍化し、この増加にともなって、最初は減食に励むが、やがてそれが破綻して過食症状を呈するもの、あるいは過食症状が前景に立つものの比率が増してきた」(野上 [1998:7 頁])。また、近年では拒食を経過しないままいきなり過食に至るケースも増加しているようである。過食症は、その食行動のせいもあって、拒食症者以上に症状が慢性化しており、抑鬱的で内心に空虚感を抱き自己卑下が激しい。

一方、下坂は個性追求型と過食との関連について明示的に述べていないが基本的にこの二つは重なり合うものと見なしてよいようである。これは水島広子の以下のような分析からも伺える。水島 [2001] によると、クロニンジャーのモデルにのっとった性格の七因子、遺伝的要素の強い因子である①「新奇性追求」(好奇心・衝動性)、②「損害回避」(心配性・怖がり)、③「報酬依存」(人情味)、④「固執」(辛抱強さ)、と環境の影響の強い因子⑤「自己志向」(自尊心)、⑥協調、⑦自己超越、のうちで摂食障害を分析すると、その特徴として、摂食障害患者には「協調」の高さの一方で「自己志向」の低さが目立つ。なかでも、過食嘔吐型の拒食症では「新奇性追求」とあわせて「損害回避」が高く、やせて美しくなりたいという願望が強い一方でストレスがたまりやすく悪循環的な思考に流れやすいタイプが目立ち、かたや、過食の伴わない制限型の拒食症では「損害回避」と「固執」が高く、この場合拒食はマイペース型の人が周囲のペースに流されてしまうことに対する抵抗のようなものだという。水島が引いている新奇性の追求とは下坂が指摘する個性追求型に多分に重なるものと理解できるであろうから、個性追求型の拒食症の増加と過食を伴った拒食症の増加は並行した現象であると推測できる。

さらに、水島が過食嘔吐型と制限型を区別する指標としている新奇性／固執とは、自他に対するベクトルの差異として読むことができるように思

われる。つまり、自分にこだわる固執が内向きであるとすれば、新奇性は外向きである。個性追求型に重なる新奇性を外向きと呼ぶのは意外に思われるかもしれないが、そこで見出される自分へのこだわりが他者との比較においてなされていたことに注意しよう。

かつて D・リースマンは、高度消費社会における社会的性格の変化を、「内部指向型」から「他者指向型」へと描き出したが、これと似たような変遷が摂食障害にも認められるようだ。下坂[1999]も、従来のタイプを「美容のための理由ははっきり口にしなかったし、禁欲的で、現世をいとい、甘い綺麗な童話のような世界に憧れていた」(69 頁)と形容する一方、先の引用でも確認したように、個性追求型は美を追求し、他者の目を気にする。また、「過食症は、無食欲症に比べれば異性関係を作れる者が多」(108 頁)く、その場合過食はまず消失するが、「相手との感情齟齬を自覚すれば、たちまちに症状は復活する」(109 頁)と述べている。従来なら自分の内側で現実から逃避するようにイメージを膨らませていくタイプが多かったのにならして、よりストレートに自分の見てくれ(イメージ)にふりまわされていくタイプが増えているらしいのである。当然、これはダイエット指向と親和的である。

拒食症の増加が目立つようになり、またその傾向も変化してきたと言われるこの 80 年代は、折からのバブル景気にともなう労働力の需要の高まりもあって、周辺労働力化を伴いつつ女性の社会進出が進展していく一方(3)、消費社会化の進展で女性がより消費の主体としてクローズアップされていった時期でもある。言い換えるなら、女性に多様なライフスタイルが提供され、拒否すべき成熟した女性像そのものが(少なくともタテマエのうへでは)自明性を失っていった時期である一方、女性が高度消費社会の提供する多様なイメージの食べ物にされるようになった時期でもある。こうした流れのなかで女性の成熟拒否という説明が当てはまらなくなっていくのは当然のことであろう。そもそも当の女性の固定した成熟モデルが妥当しなくなっているのである。

のみならず、患者が損害回避するときの指向先が内向きから外向き、つまり内部指向から他者指向へ切り替わっていったことも同様に理解できる。成熟しようとする女性にたいして母親のような社会で占める固定した役割や一定のライフコースが待ち受け、それ以外にほとんど逃げ場がなかったのであれば、それを拒絶しようとする女性は内側にこもらざるをえない。いわば、夢のなかに生きるしかなくなる。

他方、固定した役割モデルが妥当性を失い、たとえ表向きであれ、社会から多様な女性のあり方が呈示されていけば、女性の指向はより外側に向けられていく。とはいえ、外的な目標を設定して他人との、とりわけ競争的な関係に入ろうとすれば、失敗や挫折のリスクを犯さなければならない。このとき、一見すると他者との競合的な関係に直接入らなくともよいダイエットや女性美の追求が、とりわけ損害回避指向の高い人にとって、お手頃で安全な「外的」目標として選好されやすくなるのは肯ける話である。

また、新奇性追求の因子は遺伝性の濃いものであると言われるが、80年代の高度消費社会のなかで女性が新しい職であれ、新しい商品であれ、新奇なものを手にするコストがそれまでよりもかなり低いものとなっていった。そもそも高度消費社会が常に新しい消費の欲望を生産することで資本主義を回してく社会であったことを考えれば、新奇なものに手を染めるチャンスはそれだけ誰にでも開かれたものになっていったと言ってよい。摂食障害はしばしば自己同一性形成の不確かさといったかたちで説明され、親の言うことを素直に聞いてしまうよい子が多い等々が指摘されているが、当の摂食障害が増大するのは脱工業化した豊かな国である。脱工業化した高度消費社会的な状況のもとでは、摂食障害、とりわけダイエットと結びつきやすい過食嘔吐型拒食症に親和的なパーソナリティを帰属できる因子が拾いやすくなるとも言えるのである。富澤治によれば、拒食は勝利であり快感をもたらすが、過食は失敗であり敗北、嘔吐はその回避行動なのだという。

2. 身体という檻への幽閉—空回りする再帰性

摂食障害はアイデンティティ障害として把握されるが、当の女性にはしばしば自分が摂食障害であるという自己認識があるし、またそのように同定される。その限りでは、たとえそれが病理であるとしてもその人の社会的なアイデンティティはある意味で達成されているといってよい。では、摂食障害あるいはその手前に位置するダイエットは個人と社会とのあいだでどのようなおりあいをつけているのだろうか？

ダイエットが持つ社会的な意味は、ダイエットをとおして女性が「社会に受け容れられる」ことにあるとされる。ダイエットをしてやせることができれば、お洒落ができるようになり周囲も自分をより好意的に見てくれる。早い話、もてるようになる。実際、学生からもダイエットでやせたことで周囲の反応がよくなったといった話（と、そのことの一抹の虚しさ）を聞くことがある。つまり、やせることで対人関係をより良好に循環させ、女性としての自己評価も高めることができるというわけである。

しかし、このような戦略を採用することそれ自体がある種の矛盾をはらんでくる。というのも、ダイエットをして人当たりをよくしたいと考えるようになるのは、その人が女性として扱われているからである。だが、やせることで自分がより女らしく見られるようになるということは、それだけ自分の女性としての自明性が解体していくということでもあるだろう。というのも、「女らしさ」はそれだけやせること、ひいては自己管理をとおして達成されなければならないものとなり、それがうまくいけばいほど自分が生まれつきの女であるということが意味のないものになってくるからである。のみならず、こうした「構築主義的な」女性観が極端に突き進められれば、女性性とはその都度達成すればよい装着可能な部品のようなものとなり、それだけ自分が本来的に女性であるというような意識は希薄なものになっていくように思われる。

そのうえ、女性性が「構築主義的に」達成されるものになっていけばいくほど、女性としての自己実現はそれだけ大きく他者に依存したものにな

る。ところが、自己評価は、それを他者にあずければあずけるほど、低く不安定なものになりやすい(4)。しかも、一方で、商品化したダイエットその他の美容法は、誰にでも美の追求を可能にする。高望みだけなら誰にでもできるわけである。だから、こう言ってよいであろう。つまり、ダイエットや女性美の追求といった「構築主義的な女性像」にハマればハマるほど、もともとの自分に対する評価は低いものとなり、将来達成すべき女としての自分の価値が高いものとなっていく可能性がある、と。言うなれば、自己評価は低いのにやたらと自尊心だけは高い状況が作り出されやすい、と。こうした落差は摂食障害者によく見られるパーソナリティだと言われているが、高い自尊心と低い自己評価の落差を埋めるためにダイエットへ向かうだけでなく、ダイエットそのものがこうした落差を強化していくところがあるわけである。

たとえば、山登敬之[1988:41頁]は、拒食症に陥った女性を見ていくと、もともと痩せ願望があったものが、転校や進学といった身のまわりに起こった生活上の変化をきっかけにダイエットを始め、それが拒食症につながるというパターンが数多く見出されると述べている。下坂もそれを次のように述べている。「これまで一定期間維持してきた学業成績、スポーツ成績、勤務成績が落ちてきたときや学業や勤務に嫌気が生じてきたとき—これには必ず人間関係の不調和がからんでいる—に、それに入れ替わるかのように食事制限が始まる。あるいは目前に迫ったクラス替え、転校、受験、就職といった不安、あるいは家庭内での緊張が高まった状況などに直面して摂食が始まる」[1999:204]。身のまわりに起こった対人関係にかかわる変化が自尊心と自己評価の落差を大きくするきっかけとなり、その埋め合わせとして採用したダイエットがかえってその落差を大きくしてしまい拒食症につながっていく、という流れをここに読みとることができるだろう。

しかも、ダイエットの帰結は女性の内面に跳ね返ってくる。うまくいかなければそれは自分が弱いからだということになりやすいし、たとえうま

くダイエットに成功したとしても、リバウンドを防ぐために継続的な自己管理が要請される、といった具合に、ダイエットそのものが新たなダメージの可能性を生み出し、それを回避しようとすればますますダイエットから抜けられなくなる。すでに述べておいたように、ダイエットは損害回避指向の高い人が採用しやすい外向きの活動であった。だが、ダイエット自体が損害回避的な性向を強化し、ダイエットへの依存度を高め、ますます他者の視線を気にするように仕向けかねないところがある。

このようにダイエットは、ダイエットする女性の自己評価を悪循環的に不安定かつ低いものにしていくところがある。むろん、誰もがこうした悪循環に陥るわけではなからうが、消費社会化の進展で自己評価を他者に委ねていく傾向が増大するなかで、ダイエットはそれに追い打ちをかけるように、自尊心と自己評価の落差を促進する因子として働く可能性がある、ということではできであろう。

ところで、ダイエットを介して対人関係を良好なものにしていくとは、他者との関係を直接操作する代わりに自分の身体を操作して他者との関わりを調整しようとすることにほかなるまい。具体的な他者との関係のあいだにスリムな身体という緩衝材を挟み込み、いわば身体を自己の代用物にしようとしているのである (5)。

その意味で、ダイエットする身体はケータイと似たようなものと言えるかもしれない。ケータイを手にする事で、まだ今は存在しない近い将来のつながりを実現する可能性が手に入る。それと同じように、スリムな身体を手になれば他者と良好なつながりを手に行っているかのようなイメージを抱くことができる。やせたときの自分はそれを見してくれる想像上の他者と裏表である。痩せればみんなから受け入れてもらえる。もちろん、今はそんな他者はいない。だが、ダイエットに成功すれば将来そのような他者が現れるに違いない。つまり、ダイエットは、他者との理想的な関係を先取りするものであり、具体的な他者から切り離されたイマジナリーな未来の他者を投射してくれるのである。

ここには、現在を未来の手段として過程化する未来志向がある(6)。自己の本来的な基盤が現在よりも未来に移っているのだ。しかし、自己の準拠点を現在から未来へと置き換えることは、現にある具体的な人間関係を回避することにもつながる。自己は、現在の具体的な他者との関係から退いて、他者との関係を代行する身体のみと関わろうとするからである。ダイエットする身体は、他者との関係をより良好にする媒体である以上に、他者との関係をより間接化する媒体なのである。このようにダイエットはディスコミュニケーションな態度を伴っており、身体が同時に對他関係を代行する身体への依存を強化する。操作しなければならない対象が相手というよりもまず自分の身体になってくるのである。

しかし、女性と社会をつなぐ回路として、ダイエットする身体はあまりに脆弱でか細い。前述のようにダイエットは低い自己評価と高い自尊心の落差を促進し、それを埋めるべくさらなるダイエットを促す悪循環的な構造を生み出しやすい。具体的な自他関係から切り離されたイマジナリーな自己／他者と結びついて自尊心が肥大化する一方、相変わらず自己評価の低い現実の自分がいる。とすれば、摂食障害者が、具体的な他者から遊離した誰でもない他者の視線を想定しながら、いくらガリガリに痩せても自分は太っていると認識してしまうのもうなずける話ではないか？(7)

この点でも摂食障害はケータイのメール等のネット・コミュニケーションに類比できるかもしれない。香山リカは、ネットで出会った相手と生身であった相手を同一の人物とは感じられなくなるという解離的なケースを紹介している(香山[2002:115頁])。ネット・コミュニケーションを介してネット上にヴァーチャルな自己／他者が立ち上がり、極端な場合にはこのヴァーチャルな自己／他者を生身の自己／他者と重ねられなくなるように、摂食障害ではダイエットする身体を介してヴァーチャルな自己／他者が立ち上がり、それが生身の具体的な他者から切り離されて作動するようになっている(8)。他者からの肯定的な評価をめざしてはじめたダイエットが、かえって具体的な他者をどんどん自己から切り離していき、他者は

操作される身体から派生するイメージにすぎなくなってしまうのである。

具体性を失っていくのは他者ばかりではない。自分の見てくれを過剰に意識する摂食障害者には、そうした自己がどのように映るか振り返って見るだけの自己意識が働かない。これは一見すると矛盾したものの言いに映るかもしれない。摂食障害者に見出されるのはむしろ過剰な自己意識ではないのか？しかし、この過剰な自己意識が働くときに介在してくるのは、具体的な他者ではなく、自己の身体とそれに相関して投影される想像上の他者である。「まだ太ってる」。言ってみれば、自分が作り出した幻影に籠絡されながら、空虚な自己承認を求めているのである。こうなれば自己意識は空回りをはじめ、身体は具体的な他者という評価の軸から切り離されて漂流を始めざるをえない。

このときダイエットする身体は、他者ひいては社会への通路をふさぎ、自己を身体の内側へと幽閉していく壁と化す。しかも、ダイエット自体、自分が本来的に女性であるという自己意識を希薄にするような契機を抱えていた。具体的な他者から切り離された自己は、代わって他者と関わってくれるはずの身体との相関でのみ自己でありうる。ダイエット（あるいは嘔吐）する身体は、具体的な他者から独立して計測可能な物体であると同時に、自己に感覚的刺激という確かなリアリティを与えてくれるからである。

前者について言えば、「彼ら自身は、日課のように体重計に乗ることでより自分の努力を「客観的に」確かめることができ、彼らの痩せは、他者からも、それがプラスの評価であれ、マイナスの評価であれ、瞬時のうちに確かめられる」（下坂 [1999:65 頁]）。丁度ケータイの着信記録が他者とのつながりを確認させてくれるように、客観的に計測可能な身体が自他関係を確認する指標になってくれる。

後者については、そもそも身体はわれわれの意識とは独立して作動するそれ自体別個のシステムであり、意識のコントロールを超えている。たとえば、食欲は基本的にわれわれのコントロール範囲を超えており、食欲を

コントロールできないからこそ食事の量で体型を調整しようとする。ところが、ダイエット、ひいては摂食障害は身体の機能を失調させることで身体の輪郭を明確にし、身体が自己に帰属することを明瞭に意識できるようにする。「日々痩せていく自己の身体を確認できること、空腹時の胃の痛み、痩せに伴う冬季の耐え難い寒さなど。これらは、彼らに倒錯した形ではあるけれども、一種の確かな存在感を与えてくれる」(下坂 [1999:72 頁])。また、過食行為は誘眠作用を持ち、頭を空っぽにしてくれる。嘔吐も頭を空白にしながら、強い内臓感覚を引き起こす、という。

しかも、症状が既存の他者に過剰に同調的な関係を破壊しながらも、病人として依存的な人間関係を温存してくれている。それを隠れ蓑にして、身体に介入しては身体に翻弄されるその狭間に自己の居場所・自己の存在感覚を見出すことができるのである。もっとも、この自己とは具体的な他者から切り離された自己ならざる脱社会化した自己なのではあるが。

このようにダイエットは、個人と社会のおりあいをつけようとする振る舞いが、かえって個人を社会から引き離して身体の内側へと閉じこめていく逆説的な構造をそなえている。その結果具体的な他者と関わりを結べなくなるという意味においては、摂食障害も一種の「引きこもり」だと言ってよいかもしれない。

のみならず、浅野によれば、ダイエットや摂食障害をとりまく語り口そのものが問題を女性の内面へと閉じこめていく働きがある。浅野はダイエットが問題になる軸を三つおき、①女性の社会参加、②女性の役割、③女性にとっての美しさ、それぞれに女性の意識や価値観といった内面性の軸と女性に特定の価値観や意識を強制している社会の軸を対立させている。もちろん、浅野が批判的なのは問題を女性の内面へと回収しようとする社会の軸である。

内面への回収メカニズムを採りだしてみせる浅野の手際は見事なものである。まず、自己を社会に適合させるためにやせる努力をすることが女性に女であることの自己管理を強いる。摂食障害へと至る女性たちはその延

長としてダイエットの危険性を指摘する記事から嘔吐や下剤の使用を学習し、また自分が摂食障害者であると認識するようになる。現に浅野が見つけることのできたインフォーマントは、自分を摂食障害と同定していたが、それは医学的な診断に基づいたものではなかった（これに関連して浅野は80年代後半以降、雑誌記事が「事件報道型」から「告白型」へ移行したことに注意をうながしている）。心の病気として問題を自分の内面へと回収していく「摂食障害」というカテゴリーが、メディアを介して医療的な文脈を超えて流通し、彼女たちのアイデンティティの一部を形成してしまっているわけである。しかも、嘔吐やビョーキに伴うマイナス・イメージが女性の自己評価を下げる方向にはたらく。いわば女性たちはダイエットにたいして二律背反する見方を抱えながら一種のシニシズムを生きざるをえなくなるわけである。にもかかわらず、こうした状況で摂食障害をパーソナリティの問題に還元して健全なダイエットとそうでないダイエットを区別したり、摂食障害からの回復を自己発見の物語へと美化することは、ダイエットそのものを問題にする視点を抑圧し、問題をさらに女性自身の内面に帰属させ身体の自己管理を強化していくことになる。

これにたいして浅野は摂食障害からの回復過程でフェミニズムが大きな役割を果たすこと示していく（9）。フェミニズムは女性にダイエットに代わる依存先を提供しながら自立を促す。ここでフェミニズムが果たしている役割とは、摂食障害が個人の問題へと回収されていくのに抗して、摂食障害を社会的なコンテキストに据えなおし、ダイエットする身体とは別のところで個人と社会をつなぐ筋道をつけようとするものだと言ってよい。そのためには、たとえば、同じ境遇におかれた者同士が困難を共有し声をあげていけるセルフヘルプ・グループのような親密圏が有効な役割を果たすことになるだろう（10）。こうして摂食障害は、問題を個人化し摂食障害者を社会から引きこもらせていく媒体から、同じ困難を抱えた者同士を結びつける媒体へと転化することになる。

こうしてみると、問題を個人化する医療実践あるいは医療言説と問題を

社会化しようとするフェミニズムはまさに正反対の場所を占めていることが分かる。医療が患者の内面を操作することで社会と折り合いをつけさせようとしているとすれば、フェミニズムは社会のなかに女性たちの居場所を作っていこうとしているのである。こうして自分たちの経験をいかなるコンテクストに着床させるか、そこに「解釈という政治」が作動する。もっとも、浅野自身も認めるように後者は困難な道でもある。なぜなら、女性の内面を焦点に据えてくるのは女性たちがおりあいをつけようとしている社会そのものでもあるからだ。

3、内なる「女性性」の没落ーロールプレイング・ゲームのなかで

摂食障害を考えるにあたって、浅野は問題を主として女性が痩せた身体を「主体的に」選ばざるをえないようなダイエットの風潮、あるいは「性の商品化」に焦点を当てていた。だが、ここでは摂食障害をもう少しひろいコンテクストから考えてみたい。

他者との具体的な関係を回避する緩衝材としてスリムな身体に依拠するのは女性特有な問題ではある。とはいえ、既にケータイとダイエットする身体を類比的に扱ってみたように、個人が孤立していき他者との直接的な関係を回避するためになんらかの緩衝材（援助交際、セックス、アルコール、パチンコ、ネット・コミュニケーション等々）に頼ってしまう事態は、ダイエットのような局面だけではないように思われる。またダイエットは、現在の自分（の自己評価）と将来の自分（をあてにした自尊心）の落差を橋渡しするべく他者からの承認を求めてなされるものであった。つまり、先行きの自分をあずける身近な他者を必要としながらも、何らかの緩衝材、いわば鎧に依存せずにはその他者と関係を維持できない状況が生まれてきているのである。

こうした状況の到来をどのように考えればよいのか？ここでは、この問題を、固定したライフコース・モデルの解体、女性間競争の拡大、自他関係のヴァーチャル化という、三つの過程の収束点として描き出してみた

い。

役割モデルの個人化

従来女性にとって自分の将来を仮託するために参照されたのは、何よりも結婚して主婦になるといったライフコースや母親役割であったと考えられる (11)。こうした座標軸を参照することで、先行きの自己イメージを思い描き、また、そこから現在どう振る舞うべきかを決めることができた。もちろん、これは近代資本主義の成立過程で再編され、創られた「伝統」にすぎない。しかし、それがいくら抑圧的であろうとも、「女性性」をめぐる一般的に受容されたイメージがあり、それを資源として自分の在り様を決めることができたのである。

先述の状況は、こうした「伝統」が解体していくなかで、女性の同一化する役割モデルが流動化し、それとあわせて自己／他者のあり方も変質していることに求められるように思われる。母のような確固とした性役割や一定のライフコースが社会に屹立するとき、問題になるのはこの役割やライフコースを受け入れるかどうかである。だが、この一般化した役割モデルが少なくともタテマエのうえでは解体して女性性が生殖から切り離され、女性の多様なあり方を可能にする状況が出てくれば、女性は自分ができるような女になればよいかを自分自身で選択し、実現していかなければならない状況に置かれることになる (12)。

一見すると、こうした状況はそれぞれの女性にそれだけ多様な選択の可能性を与えてくれているように見える。しかし、固定した役割モデルが解体したということは、ただ選択の自由が生まれたというだけではなく、そうした選択肢そのものをも自分で見出していかなければならなくなったということでもある。これがきわめて困難な作業であることはみやすい。女性個々人の生き方が多様化していくと同時に、女性が「成熟」していくためのモデルもどんどん個人化しているからである。

では、個々人はどのようにして自分に適用可能な役割モデルを参照する

ことができるだろうか？こうした個人化した状況にあっては、参照すべきモデルも個人化したものにならざるをえまい。つまり、固定した役割モデルが利用できなくなったときに参照できるものがあるとすれば、それは独自に女として社会的地位を築き上げていた個々人なのである。だからまた、自分が採用する役割モデルとの出会いは、しばしば運命的なものとして描かれるようになりやすいだろう。もちろん、誰々は母の鏡といった具合に、具体的な個人が役割モデルとされることは、別に珍しい話ではない。だが、ここでは具体的な個人が役割や規範の実例というより、実例そのものが一個のモデルを構成している（たとえば、「アグネス論争」を想起せよ）。

現に、80年代には女性の生き方を扱った芸能人等のエッセイ本の類がベストセラーの常連になったし、女性誌の発行部数も増え続け、そこでは期待される女性役割を演じるためのマニュアルが提供された(13)。一般化した役割モデルに代わって役割モデルを提供したのは、主としてメディアを介して喧伝される、具体的な個人だったのだ。

役割モデルの個人化は役割モデルの意味をも変化させる。女が原則として母になるのであれば、母という役割モデルの存在は「予期的な社会化」(学習)を可能にする。つまり、誰もがそのようになるものとしてモデルを眺めることができる。しかし、具体的な個人をモデルにしまうと、誰も(というわけではないであろう)が母親になれたように、誰もがモデルとする個人と同じように自己実現できるというわけにはいなくなる。各自が置かれている状況は才能から資産・縁故にいたるまでバラバラであろう。80年代には自立して働く女性の姿というものが随分と喧伝されたが、これは個々の女性が、それこそ男並みに働くことで、個々に達成していかなければならないものであり(もちろん、家事もある)、誰もが気軽にアクセスできるほど敷居は低くない(14)。個人化した役割モデルでは、同じ女性として同一化の対象になりうるにしても、そのモデルを達成していくための能力や資源も個人化されている。しかも、雑誌等で呈示される

イメージの少なからずは結局のところ既存の女性のイメージの焼き直しにすぎなかった(15)。女性の多様な可能性が示されても、多くの人にとって、そこへ上っていく梯子は外されていたわけだ。ここに女性が弱者と強者とに分化していく端緒が見いだせるだろう。

それゆえ、事例として個人に投影される役割モデルは、一見すると極めて具体性を帯びたものでありながら、アクセスするリソースから切り離されているという点では極めて抽象的でイマジナリーなものにすぎなくなってしまう。いいかえると、モデルとされる具体的な個人は生きているという意味では実在するに違いない。しかし、その具体的な個人を役割モデルにしている女性たちからみれば、自分がモデル並みになる手段や資源を事実上欠いている限り、具体的な個人からなる「個人化した役割モデル」はヴァーチャルな存在と化していると言ってよい。それはお話のうえの人物と代わりがないのである。いや、物語が特定の社会の成長モデルを呈示する役割を果たしていたとすれば、そちらの方がむしろ「実在的」であると言ってよい。たとえば、「母親」とはそのような物語であったのだ。

これはダイエットと同型の問題圏を想起させる。すなわち、自分がおかれている現状とはあまりに食い違ったイメージに籠絡されることで、自己評価と自尊心の落差を拡大させ、それを埋めるためにさらなる自分探しを続けるという構図である。しかも、「自分探し」は達成される理想的な自己を常に先送りし、現在を過程化することで理想と相容れない現実の自己の温存をはかっている。ここには現実から遊離したままただただ追求されるヴァーチャルな自己とそれをまなざすヴァーチャルな他者が立ち上がっている。

女性間の競争空間の拡大

このように80年代に女性が追求した個性や新奇性は多分にイマジナリーなものであったように思われる。これは女性が多様な商品やサービスを享受する主体となった消費の領域にだけ当てはまる話ではない。女性

の社会進出はその内側から見てもイマジナリーなものであったと言えるのではない。なぜなら仕事で業績をあげることがメディア上で流布するイメージとは違って、必ずしも女性性の達成につながらなかったからである。

たとえば、1997年の「東電OL殺人事件」(総合職に勤める39才の女性が殺されるまでの5年間にわたって渋谷円山町で売春婦をしていたことが明らかになった)、およびそれに対する高学歴・高キャリアの女性から数多くよせられた共感的な反響は、職場でエリートとして男性と伍してきた女性の心の空虚を示すものとして語られていた。

一体、そこでは何が起こっていたのか?じつは仕事に励む女性はどう一つの競争にも巻き込まれていたのだ。「女らしさ」が現在のようなかたちで追求すべき資源となっていたのは、比較的近年のことだと言ってよい。たとえば、これはアイドルのような芸能人女性のスタイルの変遷を追ってみただけでもよくわかる話であろう。そもそも女性が同一化する役割モデルが固定していたとき、美人であることは、「たまたまついてきたおまけ」のようなもので、もっぱら結婚・恋愛市場で限定的にしか働いていなかった。しかし、女性が社会に進出する道が開かれたり、男女交際がよりオープンになり恋愛が必ずしも結婚につながらないような状況が生じてくれば、女性を評価する基準としての美もより広範な領域に浸透していく。このときマス・メディアが大きな影響力を持つことは言うまでもない。仕事をとおして自己実現しようとしても、好むと好まざるとに関わらず、美や「女らしさ」といった評価に巻き込まれていくのである。

こうして「女らしさ」の要請が全域化すればするほど、女性は美しさ等々をめぐってあらゆる場面で横並びに評価されることになり、それだけ同性間で競争しあう局面が拡大してくる(16)。社会進出した女性は、男性と競争するばかりか、美しさのために女性同士でも競い合わなければならない。自分を女性であるとする自己認知(ジェンダー・アイデンティティ)に比べて、他者から自分が女性として認知されることの意味がますます大

きくなる状況が生まれてきたのだ。

もともと女性が「選ばれる性」として自己演出を強いられること自体に、女性の自己認知をあまり意味のないものにしていくところがあった。そのうえで「女らしさ」が全域化して性の商品化が進行すれば、さらに「女らしさ」は女性がその都度戦略的に採用するパーツのようなものとなり、これまで以上に女であることが演ずべきものになっていくだろう。「女らしさ」をめぐる女性間の競争のなかで、「女性性」を支えていた自己認知が希薄化し、他者認知に依存した「女らしさ」というイメージばかりが社会を浮遊していくようになるわけである。

しかも、先に述べておいたように、「女性性」の自己認知を支えるにあたっては、もともと具体的な他者から離れても自己同一化を可能にする一般化されたライフコースや母親役割の存在があったと思われる。つまり、「母性」はそれを受け入れるにしても否定するにしても女性の「女性性」を支える（少なくとも一つの）足場になっていたのである。しかし、その足場が足場であることをやめ様々な女性のあり方の一つのヴァリエーション、イメージの一つでしかなくなったとき、「女性性」という自己認知も空虚なものとなっていかなざるをえまい。

これは、男にとって「男らしさ」があらゆる局面で要求されうるように、女にとっても「女らしさ」があらゆる局面でポジティブに要求されうようになったのだと考えればよいかもしれない。従来、われわれの生きる社会では、「男らしさ」を発揮できる場は遍在的に見出されうる一方、その「男らしさ」はつねに意識されなければならないものではない。他方、「女らしさ」は、しばしば排除の理屈と結びついており（「女だてらに---」）、「男らしさ」よりも恒常的に意識されなければならないとみなされてきた。つまり、「女らしさ」が関与的になる場がより限定されているため、女性はそれだけ自分がどのような場所にいるか意識的になる必要があったのだ。ところが、いまや、女性性の自己認知が希薄化する一方で、美人であるといった「個人的な事柄」がより「公的な場面」でものをいうようになって

きたのである (17)。

こうして美しさや痩身に代表される「女らしさ」のイメージが、生殖とは別個に女性の役割モデルを構築するもっともお手軽なリソースになっていくと、浅野の指摘するように「自分（の追求する女）らしさ」と「女らしさ」のあいだに食い違いが生じてくることにもなる。たとえば、浅野があげる過食・嘔吐の例に、官庁に就職して周囲から「できる女性」という評価をうけるようになったが、それが「女らしさ」に反するとも受け止められてしまい、強い葛藤を抱え込む女性の話がでてくる。

しかも、摂食障害が成熟拒否に結びつけられてきたように、摂食障害者予備軍は多くの場合、過小なセクシュアリティしか携えていない。こうしたよい子にとって「女性性」を脱落させた「女らしさ」をめぐる競争に巻き込まれること自体が自己評価を維持しにくく生きづらいものであることは見やすい。しかも、バブル経済の破綻がさらに女性のキャリア志向を打ち砕く。母性から解放されたところで「自分らしさ（女性性）」を追求しようにも、そこにはよりセクシュアリティに比重をおいた新たな「女らしさ」が待ち受けていたというわけである。

浅野が採用する説明にしたがうなら、社会のなかで「自分らしさ」の占める場所がなくなっていく状況で、他者から期待される「女らしさ」と自分が自分に帰属させたいイメージとを調停し、二つの競争で勝とうとする手段がダイエットなのだということになる。ダイエットなら身体の自己コントロールをとおして「自分らしさ」を維持しながら「女らしさ」を達成できる。ダイエットなら、期待される「女らしさ」と現実、あるいは高い自尊心と低い自己評価の落差を埋めてくれる、というわけである。

とはいえ、この手の説明はあまりに「自己コントロール」や「主体性」ということを強調しすぎているように思われる。というのも、同調志向のダイエットをあえて自己コントロールと呼ばなければならない理由がよく分からないのだ。ダイエットではなく「拒食」であるのならまだ分からなくもない。拒食ならそこに主体性を読み取ることもできよう。スリムな身

体に乗り入れてしまえる「自分らしさ」とは随分アモルフなものではあるまいか？そのうえ、ダイエットの見返りは、他者認知にますます依存したイマジナリーな自己である。ここに見出されるのは、むしろ「自分らしさ」の身体への局所化であり、コントロールする主体の希薄化だというべきではないか？

だから、ダイエットとは、「女性性」から切り離された「女らしさ」の戯れにうまく乗れない女性が、自らの母性を脱落させた「女性性」の自己認知を消すために採用した戦略だと考えた方がよい。「(女としての)自分らしさ」を仕事のような何らかの課題の達成に仮託する帰結が否定的なものに行き着いてしまうとき、仮託する対象が世間に流布する「女らしさ」、操作された身体へと切り替えられていく。ダイエットは、世間に流布する「女らしさ」に身を任せようとすることで、自分の内なる「女性性」を否定しながら自己をイメージ化して、かろうじて「自分らしさ」を確保しようとする自罰行為なのである。

自他関係のヴァーチャル化

以上で、われわれは女性と取り巻く二つの状況を確認してきたことになる。つまり、「自分探し」的状況と「女らしさ」をめぐる女性間競争の拡大。いずれも、他者に自己評価を委ねながらその他者に煽られ、自尊心ばかりが高くなる一方で自己評価を低く不安定になりがちな状況を裏打ちしていることが分かる。現に、欧米では、80年代以降、女性の社会進出と女性美の追求が並行して広がっていくなか、女性の外見をめぐる自己評価が下がっていったことが確認されている(18)。この点で、いささか文脈は異なるが、きわめて打算的な「新専業主婦志向」の登場や「自分探し」ブームの終焉も、やはり女性間の競争の拡大にともなう「女性性」の自己認知の希薄化、あるいは相対的な地盤沈下とその後の展開を体现しているように思われる。

94年にバブル経済が崩壊し女性の就職事情が悪化していくが、これと

前後するようにしてキャリア志向に代わって専業主婦志向が回帰してくる。こうして新たに登場した専業主婦を、小倉千加子は「新・専業主婦」と呼んでいる（平成9年度厚生科学研究「女性の未婚率上昇に関連する意識についての調査研究」）。この新専業主婦層は、「夫は仕事と家事、妻は家事と趣味」という、扶養されることの特権を存分に享受しようとするライフスタイルを選好しているとされる。また、子育て卒業後に好まれるのは、フラワーアレンジメントであったり、エッセイストであったりと、見栄えのよいカタカナ職業であるともいう（18）。

ここでは、かつてなら女の勤めとされた妻あるいは母であること、ひいてはそこに至るまでの「女らしさ」が、自分がそのような者であるからというよりは自己充足のための手段と化している。「女性性」へ同一化する代わりに、「女性性」を身すぎ世すぎの手段にしてイマジナリーな「女らしさ」や「自分らしさ」と戯れるような、「女性性」への同一化を希薄化させたライフスタイルが選択されるようになってきているのだ（19）。もちろん、このとき競争相手になるのは同性である。してみれば、新専業主婦とは、男性との競争からは撤退して、女性同士の競争に特化した存在なのである。

そればかりか、新専業主婦には「個人化した役割モデル」の矮小化を見てとることでもできる。こうしたライフスタイルを選択するにあたってはもちろん「カリスマ主婦」のようなお手本がいる。つまり、個人化した役割モデルをより卑近なものへと矮小化して、モデルへのアクセシビリティを高める動きが見出されるのだ（もっとも、専業主婦志向自体が高望みだという指摘もあるが）。一連の「ミニ・カリスマ」ブームは個人化した役割モデルをより具体化していく動きと考えることができるだろう。

とはいえ、矮小化とはこれだけのことを指して言っているわけではない。「自分らしさ」や「女らしさ」を他者の評価に委ねている以上、いかなる役割モデルを採用するにしても、あるいは自己実現の度合いや充足度を測るにしても、具体的な他者の視線が必要になる。つまり、周囲の専業

主婦仲間の評価を気にしなければならない。こうなると専業主婦仲間は自己評価を定める指標、つまりはモデルと化してくる。同性の身近な他者が、競争相手であると同時に、自らが同調し差異化するための役割モデルになっているのだ (20)。

しかし、役割モデルがより身近で具体的なものになったからといって、モデルのヴァーチャル化が押しとどめられるわけではない。むしろ、身近な対人関係がヴァーチャルなものに転化していくことになる。繰り返すが、自己評価はそれを他者にあずけてしまうほど不安定で低いものになりやすい。互いが互いを役割モデルとする競争関係では、自分が他者にどう評価されるかを意識しながら振舞う結果、自己否定のリスクを回避しようとして、誰もが他人と同じ「よい子」的な選択をしては競い合う鏡像的な関係を帰結する（「公園デビュー」や「お受験」、イジメなどを想起されたい）。ケインズの美人投票さながら、「自分が美人だと思う人ではなく、みんなが美人だと思う人に一票投じよ」というわけである。そして、互いが他人の演じているイメージに自己を憑依させるような相互関係とは、互いが互いにたいして抱いている考えや感情から遊離したヴァーチャルなものにほかなるまい。

同様の局面は摂食障害にあっても見出されるように思われる。水島 [2001] は、下坂とはうってかわって、ダイエットに走る少女たちを、おしゃれのためにやせるといっても「彼女たちにとって、おしゃれというのは、自分が独自で作り出すものというよりも、周りの人に合わせて見つけだすもの」であり、「大人の集団に入るとかなり異様に浮き上がっている若者たちも、異様さを楽しんでいるというよりは、自らの所属するグループでの横並びの価値観の中に生きてい」(27 頁)と表現している。また、前記の山登の引用を思い出してもらってもよい。摂食障害の引き金は、転校や卒業のような新たな人間関係を要請する局面であって、そこでは「女らしさ」と食い違うほどの「自分らしさ」が追求されているわけではない。

ここからさらに推測されるのは、摂食障害へいたる過程で「女らしさ」

の要請が必ずしも当事者にはレリヴァントにならない状況が生まれてきているようだ、ということである。たとえば、圓田 [2000] は摂食障害者へのインタビュー内容から摂食障害の原因としてジェンダーがどこまで効いているのか疑問を呈している。そもそも浅野が分析している事例にかんしてもジェンダーがどこまで効いているのか議論の余地があるように思われる。たとえば、彼女が紹介している G さんの例では、「G さんは、自分には女性であるという理由によって差別や抑圧を受けたおぼえがまったくなく、だから結局のところ、自分のなかのフェミニズムは、あくまでもクリクツでかためていったものだと説明している」とある [1996:153 頁]。あるいは、近年、拒食を経過せずいきなり過食へ至るケースが増大していると言われている。ここでも「女らしさ」の要請を読み込みやすい「痩せる」という局面が抜け落ちている。

もちろん、これはジェンダーが変数として効いていないということを保ずしも意味しない（女性対男性の発生比は 10 対 1）。しかし、すでに確認したように、女性間の競争関係のなかで「女性性」の自己認知が希薄化してくるのであれば、そのなかで「女である」ことにさしたるこだわりを持つことなく、「女である」ためのアイテムと戯れている「女性」が現れてきたとしても不思議なことではなかろう。主たる問題が女性のおかれている環境から生まれて来ているにしても、それが当事者の認識につながるとはかぎらなくなってくるわけである (21)。

ここでは、かつてのような「自分らしさ」へのこだわりはさして見出されなくともよい。現に、近年の学生を見ても、一頃のような「自分探し」志向は見出されなくなっている。自分にたいするこだわりはもっと身近な細々とした事々に向けられ、自分が将来何になりたいかといった程度の「大きな物語」にすらあまりリアリティを見出すことができないケースは珍しいものではない (22)。

しかし、「自分らしさ」と「女らしさ」のような大げさな食い違いがなくとも、限られた人数のなかでヴァーチャルな対他関係を操作していく局

面が日常生活のなかで拡大していくならば、それだけ自己は不安定なものとなり、「自己コントロール」の必要が高まっていく。ヴァーチャルな自他関係のなかでは、互いが互いに投影しているイメージの実態は突き止めようがなく、悪循環的な思考に流れやすくなる。自分にあわせてはいるけれど相手は表面上そうしているだけかもしれない等々（実際互いにそうしているのだが）、しばしば不安定で緊張を強いられる関係を生きなければならない。

だから、いったん同調的に振る舞えるリソース（「お受験」や「公園デビュー」等々）が持ち込まれたなら、あっという間に均衡点へと収斂していくことになるし、齟齬が対他関係内部で処理できないときには何らかのより個人化した対処法が採用されることにもなる。イメージ化した自己が対他関係から撤退して、なおかつ自己確認の場を求めて行こうとすると、おそらくもっとも頼りになるのは身体である（なお、磯野によれば「ふつうに食べられない状況とは、食のバビトゥスが身体から流出し、食の準拠点が日常の時空間の外側に移動した結果、食を通して他者とかわかりを生み出し維持する力、言い換えると人と人との間に意味を生み出し、維持する力が失われた状態である」（磯野 [2015]）。身体は自己イメージの源泉であり、身体をいじることで自己イメージや感覚を変容させることができる。もちろん、それが拒食や過食（さらには鬱病）だけとはかぎるまい。いかなる、資源が採用されるかは、その身体をとりまく環境に依存することになる。しかし、そうした個別のケースはここで扱える範囲を超えている。

以上、本節でわれわれが確認してきたのは、女性間の競争の拡大とそれに伴う「女性性」の自己認知の空洞化、および自己確認の場の身体への局所化である。80年代以降、女性であることそれ自体を競争の資源として流用できる空間（ヴァーチャルな自他関係）が成立し、この空間のなかでは女であることや自分であることが次第に自分の外側に委ねられていくようになる。しかし、自分であることを自分の外側へ委託すれば委託するほ

ど、自己はますます不安定なものになり、その都度の偶発事に左右されやすい。その待避所として、動員されるのが自己イメージを操作する場としての身体であり、身体の内側には身体感覚へと切りつめられた自己ならざる「脱社会化した自己」が内側に幽閉されている。身体は外部委託した自己と感覚へ縮減された自己の境界に位置しているのである。

00. 終わりにー

われわれは、2節でダイエットや摂食障害がヴァーチャルな自己／他者を立ち上げる作用を伴うことをモデル化しておいたが、他方、3節でモデル化してみたのは、自他関係をよりヴァーチャル化していく社会状況の到来である。前者では、ダイエットや摂食障害に向かう動機づけの源泉として「女らしさ」へのこだわりが措定されていたが、後者では、ダイエットはヴァーチュアル化した自他関係のなかでヘゲモニーをにぎるためのたかだか一つの資源にすぎず、もはやダイエットに走る固定した動機づけは必ずしも必要ない。これは、「女らしさ」にたいするこだわりとは別のところでダイエットに走る女性の存在をうまく説明してくれる。彼女たちは状況が違えばダイエット以外の手段を選んでいたのかもしれない。いかなる資源が採用されるかはより偶有的な問題になっているのである。

ダイエットや摂食障害を女性の主体化をとりまく困難に結びつけて考えるかぎり、問題は前者の圏域でおさまってしまうであろう。しかし、「女である」ことにたいするこだわりが本人の意識のなかで必ずしも葛藤の原因とならないのであれば、ダイエットや摂食障害をとりまく問題の広がりとは主体化の困難にはおさまらないように思われる。3節はそれを考えるために企てた試論である。では、前節で論じた自己を外部委託する空間の成立はいかなる意味を持つのか？

ダイエットにせよ、イジメにせよ、互いを役割モデルとする競争的な関係とは、「具体的な自他関係」のうえにヴァーチャルな自他関係を覆いかぶせてしまい、ヴァーチャルなイメージで互いの関係を調整するような関

係である (23)。もっとも、この言い方は正確ではない。他者に過剰に同調しようとすれば、そのように振舞っている自分自身の置かれている状況を振り返る余裕が生まれにくい。だから、互いを役割モデルとする競争関係は、ヴァーチャルな関係とはズレたところに見出されるはずの「具体的な自他関係」の発見／構成を困難にするとすべきであろう。

他人にあわせて振る舞い自己の選択を他人の選択に重ねてしまえば、こうしたズレが生じないようひたすら立ち回ることになる。このときダイエットする身体は、他者の眼差しに自己を委ねてズレを抹消する格好の材料なのである。もちろん、自分の身体を常に他者から好意的に受容されるスタイルへと加工できるわけではない。しかし、こうしたズレは対他関係の問題であるよりは、自分の身体の問題として把握されることになる。ヴァーチャルな対他関係は葛藤の種を産み落としても、それを修正する余地をほとんど与えてくれない。代わりに、その矛先は自分の身体、自分の内面へ向けられていくのである。

また、こうした状況では、自分の振る舞いを自分の振る舞いとして帰責する必要が弱くなる一方、場への関与はより気分的なものになっていくであろう。誰もイジメの環に加わりたくないと思いつつも、それを口にすれば今後は自分がはじき出されるかもしれない。だから、イジメに加担する。ここでは現にある関係が生み出している息苦しさを決して触れられるところがない。

ほんらい〈主体性〉とは、このようなズレを見出し互いの関係を修正する能力のことを指していたと言ってよい。自分が主体的に行為して責任を負うためには、自分が何かを為したというだけでなく、さらにその振る舞いを自分の選択として扱うことができなければならない。そこでは、自分が選択したはずの事柄と実際に生起している事柄のズレを認識できる必要がある。だが、ヴァーチャルな自他関係のなかではまさにズレが生起しないよう振る舞うことになる。ヴァーチャルな自他関係というヴェールのもとではズレそのものを見出すことが難しく、〈主体性〉がほとんど働かな

い。まさに、〈主体性〉が作動しないし、またそれを不要とするような社会関係が生まれてきているのである。

既に見たように、摂食障害とは、このヴァーチャルな自他関係と「具体的な自他関係」が、つまり「まだ太ってる」と「十分痩せているが」が、ほぼ完全に食い違っている（と他者から観察されるような）事態を指すと言ってよい。とはいえ、ヴァーチャルな自他関係のなかに自分を埋め込んで生きなければならない局面が拡大しているのなら、この手の食い違いをあまり特殊なケースと見ることはできなくなっていると言うべきではないか。これは摂食障害が治療的にさしたることがないなどと言いたいわけではない。また、外見や言動といった表層的な違いも明らかであろう。そうではなく、食い違いを意識できないまま生きなければならない局面が常態として広がりつつある以上、この食い違いを特別視する場所も日常生活から消失しつつあるのだということである。

セラピーとは、結局のところ、クライアントに代わってこのような食い違いを観察し、クライアントに食い違いの修正を動機付けるようなメカニズムだということができる。つまり、セラピーは個人に自己観察を強いる内面の働きを代行しており、〈主体性〉が作動する場所にはセラピーが位置しているのである。翻ってみれば、ダイエットでは他者の承認を獲得する身体が、摂食障害では周囲をふりまわす症状が、ヴァーチャルな対他関係では互いに同調しあう関係それ自体が、それぞれ対他関係の調整を動機づける結節点を占めていた。つまり、〈主体性〉が作動しなくなる社会状況とは、主体に相当するものが一切消滅した社会というわけでもない。むしろ、主体の機能が様々な場所に分散し、緩衝材として作用している社会なのである。

しかし、参照先としての内面が衰える気配はない。第1節で、摂食障害を「成熟拒否」とする説明図式の妥当性の失効を指摘しておいたが、それでも医学・心理学系の議論をみるかぎり何らかの「成熟モデル」を採用せざるを得ないようである。おそらく、クライアントの修復前と修復後の状

態の落差を当人に埋め込んで描写するためには、この手の「成熟モデル」に頼らざるをえないからであろう。たとえば、親子関係はこうした成熟の関門を提供するおあつらえ向きの素材となるわけである (24)。(この点で中村 [2011] の相互作用モデルは興味深い)。

のみならず、ダイエットや摂食障害では、問題が女性の内面に回収して語られていた。癒しブームやスピリチュアリティは個人の感情に焦点をあて、自己責任は個人の決定に焦点をあてる等々、その都度遭遇する出来事を個人の内面へと埋め込むディスコースとして跋扈する。個人の内面は、主体性の源泉であるというよりは、社会に生じる偶発事を処理する帰着点にされている。早い話、ゴミ箱みたいなものだ。〈主体性〉を代行するメカニズムそれ自体が内面を参照することで、問題を内面に回収するレトリックが作動する。してみれば、この内面のレトリックが、やはりヴァーチャルな世界を構成しているのである。

注

- (1) Vandereycken & van Deth [1994] に依拠して拒食の歴史を簡単に振り返っておくと、古代から、断食は神聖な活動や儀式のための身体を浄化する適切な準備とされていたし、一種の治療として用いられることもあった (ヒポクラテス)。さらに、断食はとりわけキリスト教で贖罪のための苦行として倫理的な意味を帯びようになった。断食聖人がその好例である。12c 以降、中世ヨーロッパでは多くの女性が霊的生活に加わり、断食するようになった。しかし、過度の断食を神学的な理由、さらには世俗的な理由 (共同体のお荷物になる、聖職者の権利を損ねる) から教会は拒否した。中世後期には、断食は悪霊に影響によるものとして断食聖人 (シエナのカタリーナ、フォリーニョのアンジェラ) が告発されることもあった。ただし、16c 以降こうした告発は減少し、医学的な問題として取り扱われていくようになる。だが、この時期にも「奇蹟の乙女」、つまり断食娘 (たとえば、カタリーナ・ビンダー、マルガレータ・ワイス) が世間の注目を集め、その真偽が議論されていた。

当時は、原因にしても「神聖な、天上的な理由による神の奇蹟」といった説明や、空気中から食物が吸収されているといった解釈がまだまかりとおっていたのである。もっとも 19c には否定的に見られるようになり（たとえば、サラ・ジェイコブ）、医学的にヒステリーさらにはメランコリアという診断が下されるようになった。ちなみに、この時期はそれまでに有効性が疑われるようになっていた食事療法が、再度信頼を取り戻していくサイクルに重なる。それと並行するように、ガンジーのようなハンガー・ストライキが尊敬の念を呼び、20c 頃まではカフカの小説が描いた断食芸人のような見せ物（たとえば、スーラ）も盛んであった。

こうして見ると、断食が社会的にも医学的にも常にアンビヴァレントな意味を帯びていたことが分かる。食欲とは動物にも共有されるわれわれのコントロール範囲を超えた低次の欲求であり、しかも外界の異物を摂取する。とするならば、それを排除する断食が身体の浄化を意味すると考えられたこと、さらには贖罪の手段としてさらに積極的に利用されるようになったことはそれほど分かりにくい話ではない。もちろん、この聖性は人々の求心力を高める働きにもつながる。しかし、断食が聖性を帯びるうえに、肉体的な活動力を低下させるのであれば、同時に断食が断食者を社会から離脱させていくベクトルを備えていたこともまた明らかである。医学的にも、断食は治療の手段として利用される一方で治療の対象として見られていた。つまり、ここでも断食が社会への統合と社会からの逸脱という両方の契機につながるものとして見られていたわけだ。

- (2) 同じく Vandereycken & van Deth [1994] は、19c ヴィクトリア朝期の神経性無食症の誘因として以下の五つをあげている。①外側の社会から独立して過剰に道徳性を要求するブルジョア家族のゆらぎ。②青年期の発見。③女性の理想像としての母親をゆるがせにする「新しい女」の登場。④性のタブーのゆらぎ。⑤瘦身の流行。80 年代にこれに対応する社会的変化があったことは見やすい。

他方、ヴィクトリア朝期は、男女の性差や母性が本質として固定されていっ

た時期にも重なる。この点については、Badinter [1980]、Russett [1989]、小倉孝誠[1999]を参照。そして、こちらでも、近年、性差にかぎらず個人の性向の違いを生物学的に説明しようとする科学的な言説が増殖している。

- (3) この点は、岡本英雄「日本型雇用慣行の変化と母親意識－周辺化する女性労働力－」(目黒・矢沢 [2000:7 章]) や井上・江原 [1995:4 章] を参照のこと。「パート、派遣など女性のライフサイクルに適すとされる就業形態の拡大は、家族的責任を持つ女性のニーズに応える反面、低コストで、雇用調整の容易なフレキシブルな労働力を求め得る雇い主サイドのニーズにもマッチしていた」(井上・江原 [1995:98 頁])。
- (4) 自己評価については
- (5) 下坂 [1999:108 頁] によると、摂食障害者にあつては、しばしば食べ物が擬人化して語られ、人間の代理表象になっているという。
- (6) こうした時間観念は、摂食障害と親和性の高い強迫症者の時間観念にも見出される。強迫症者の時間観念にあつても、関心の焦点は未来にあり現在が抑圧されている (Salzman [1985:92 頁])。また、サルズマンは、強迫的に反覆される拒食のような症状を儀礼にたとえているが、想像的な他者を立ち上げ具体的な他者との不確定な遭遇を回避するダイエットも、「個人化された儀礼」として捉えることができるだろう。
- (7) 摂食障害者の「ゆがんだ」身体像については、馬場謙一「摂食障害とボディ・イメージ」(野上 [1998]) や三井 [2003] を参照。
- (8) 高い自尊心と低い自己評価の落差があり (Salzman [1985:73 頁])、依存的でダブル・バインディングな態度を採る等々、摂食障害は強迫性で境界例や準境界例といってよい病態水準にあるとされるから (下坂 [1999:148 頁 ff])、こうした解離的な状態との類比もまんざらのハズレなものとは言えない。

そもそも摂食障害者の振る舞い自体に解離的でシニックなところがある。たとえば、人前で理性が勝っているときは小食だがその裏で過食・嘔吐している。摂食障害者は自分が摂食障害であると認知できるという意味では病識

があるが、自分の症状を重く受け止めないという意味では病識がない。「拒食症の少女たちは自分の心身の状態を異常と認められず困ったこととして感じていない」、「自分自身を痩せていると感じられない、食事が食べられない、月経がないだと、われわれが困ったことだと思うことについては、彼女たちはあまり困っていないように見える」(山登敬之 [1998:55 頁])。

- (9) もっとも、フェミニズムが摂食障害等の失調症の一因になっているとの指摘もある(Freedman [1986:264 頁]、荻野 [2002:])。そう言えるとするれば、それは自立を促すフェミニズムが後述するような競争的なコンテクストと共鳴してしまう要素をも抱え込んでいるからであろう。この局面では、女性の多様な生き方を肯定する思想として登場してきたフェミニズムが、女性に特定のライフスタイルを強要することになってしまう。

もちろん、女性のライフスタイル同様、フェミニズムも多様化しており、一括りにすることはできない。しかし、近年加速している新自由主義的な風潮が自己決定や自己責任を過度に強調することを鑑みれば、こうした多様化自体が女性の分断や断片化と裏腹であるとも言える。自立の強調は競争を促進する新自由主義的な市場社会と結びつきやすいし、過剰に自立を促すことがそれに耐えられる強者と耐えられない弱者とに女性を分化させてしまうことにもなりかねない。しばしばフェミニズムが強者の思想であると指摘される所以でもあろう。

- (10) とはいえ、セルフヘルプ・グループのような親密圏を創造することも一種の緩衝材の役割を果たしている(もちろん、親密圏には親子関係や対治療者関係も含まれる)。つまり、他者の承認の獲得が困難な社会のなかで、より承認の獲得が容易な親密な他者を自分の周囲に配置しようとしているからだ。だから、こうした親密圏の創造は常に内閉と開放という両義的な意味を帯びるであろう。
- (11) E・バダンテールによれば、ヨーロッパで母性が本質化してくるのは18c末あたりからとされる。このとき、最初に子供を愛情の対象とみるようになったのはブルジョア層の母親たちであり、ブルジョアの女たちは家庭に入るこ

とに地位上昇と解放の機会を見たのである。他方、貴族の女はこれにそっぽを向き、以前からの自立した生活（社交界での競争！）を引き続いて選択した。とはいえ、こうした母性的な母親のイメージは広く浸透し、上層階級でも、実質を乳母に委ねながら母親を演じなければならない状況が生まれてきたという。「ルソーやその後継者たちの強力な布教が、限りなく献身する母親になるようすべての女たちを説得することには成功しなかったとしても、ルソーたちの主張は女たちに深い影響を及ぼした。新たな至上命令にしたがうことを拒否した女たちは多かれ少なかれ、ごまかしたり、あらゆる見せかけを利用することを余儀なくされた。何かが大きく変わったことはたしかである。女たちは自分の子供にたいしうる責任をしだいに自覚するようになった。だから、自分の義務を果たすことができないと、罪悪感に責められたのである」(Badinter [1998:287 頁])。

この指摘は興味深い。というのも、貴族の女たちは母親という役割になじめないままそれを演ずる必要を求められた相変わらず女性性を希薄化させたままの層であるように思われる。他方、母性が本質化していく 19c は、拒食症が上流階級を中心に増大したとされる時期にあたる。つまり、女性性の希薄な上層階級の女性に拒食症の中心的な担い手が見出されることになる。しかも、彼女たちの自立した生活とは、決して自由とは言えない、社交界での女性間の競争であったのだ Badinter[1998:145 頁]。

- (12) もちろん、一般化した役割モデルの解体は女性にのみに限った話ではない。しかし、男性に関してはそれが相対的に遅れていたということが指摘できるのではないか。90年代以降、成果主義の導入等、職場の連帯を崩し労働者を個人化していくようなフレキシブルな雇用形態の採用が進められる一方で、若年層の就職難に改善の兆しがみられない。企業に就職して一生それを勤め上げるような男性サイドの固定した役割モデルも有効性を失ってきているのだ。翻ってみれば、女性はずでに 80 年代にそのような状況におかれていたわけである。

- (13) この点については井上・江原 [1995:7 章] を参照のこと。82-93 年のあい

だに女性雑誌の発行部数は、41 銘柄 2 億 706 万冊から 78 銘柄 4 億 716 万冊と 1.5 倍になっており [192 頁]。当時のベスト・セラーとしては『窓ぎわのトットちゃん』『愛される理由』『気配りのすずめ』などがあった。あるいは「ひまわり」や「あぐり」のような高視聴率を獲得した NHK の朝ドラを考えてみてもよいであろう。

- (14) たとえば、こんな指摘もある。『『アエラ』では、専業主婦をめぐって、読者と双方向でやり取りをしながら作る連載「インタラクティブ・専業主婦」を二〇〇一年二月十二日号より十四回にわたって掲載して。メールやファックスで来た意見は計千三百通余り。中には、もちろん日常の家事をクリエイティブな「天職」と捉えている人もいた。だが、少数だ。むしろ働いていた生活があまりに過酷で疲れ果ててしまったが故に、という人が大半だった」(ラクレ [2002:91 頁])。
- (15) 「多くの女性雑誌には、人にどう見られ思われるかのために外見を美しくして料理など作り、恋愛や芸能ネタを好んで政治や経済・社会問題などに興味を持たずともよい、との女性に要求される役割が透けて見えるのである」井上・江原 [1995:202 頁]。
- (16) この段落の論点については、吉澤「身体－ジェンダーの社会的構成」(吉澤 [1997:4 章]) および Wolf [1991] も参照のこと。また「恋愛市場」における強者弱者の二極分化に関しては、山田昌弘「恋愛の変化と結婚難」(山田 [1996:5 章]) を参照のこと。
- (17) たとえば、いまや女性がおしゃれをするにあたって意識されているのは、男の眼である以上におしゃれに精通した同性の眼なのだと言われることがあるが、こうした流れ、あるいは少なくともこうした物言いが許容されること自体にこの傾向を見てとることができるのではないか。
- (18) この点については、Wolf [1991] を参照。概して現在の若い女性の外見をめぐる自己評価は低い。今年ゼミの学生が行った簡単なアンケートでも、26 人中 25 人までが他人の目が気になると答えており、自分の外見が他人によい印象を与えていないと感じていた。

- (19) 船橋恵子は、小倉のいう「新専業主婦」志向にほぼ重なるものとして（たとえば、短大卒で若い層の子持ちの専業主婦に多い）、「幸せな家庭」志向を確認している。彼女たちは、女性であることに「お得感」を抱いており、性別分業には否定的であるが、女性を評価する基準を家事等の母親役割をこなすことに見出している。目黒依子「女性の高学歴かとジェンダー革命の可能性」（目黒・矢沢 [2000:17-18 頁]）、船橋恵子「「幸福な家庭」志向の陥穽」（目黒・矢沢 [2000:56 頁]）。また、ジェンダー非拘束的な感覚を抱いている女性ほど家事を手伝う新しい父親意識を抱いている、という（同 [2000:58 頁]）。しかも、女性の人生目標は多様化しているとされるから（同 [2000:177 頁]）、ここに「女性性」の希薄化を認めることはそれなりの妥当性があると言つてよからう。

もちろん、専業主婦を選択した結果、「母親らしさ」と「自分らしさ（のよななもの）」の相克に悩む層が出てくることになる。しかも、専業主婦ほどライフスタイルを子供に振り回されやすいうえに、母親らしさの要請はこれまた育児雑誌等を介して強化される傾向にある。この点については、山田昌弘「よりよい子育てに追い込まれる母親たち」（目黒・矢沢 [2000]）参照。なおかつ、家族の絆は自分が選択した帰結として、ますますその基盤が互いの感情に求められる傾向にあるから、主婦の抱える問題はなおさら女性の内面に向けられやすくなっている。つまり、家庭に入っても摂食障害者とよく似たダブル・バインド状況におかれてしまう可能性があるのだ。そのうえ、期待される役割と自己イメージの落差がもたらす自己不全感、娘を摂食障害に追いやりやすいパーソナリティとされていたことに注意しよう。

期待される役割は母親ばかりに求められるものではない。感情によって家族を支えようとする自体が家族にアイデンティティをあずける者や家族それ自体の空洞化をもたらす。「幸せな家庭」で求められているのは「安らぎの規範」であるという。だが、家族がたんに安らぎを得られる場ではなく、安らぎを実現すべき場でもあるとすれば、「幸せな家庭」はその都度達成すべき構築物と化す。たとえば、学生に家族関係についてたずねると、まず

口をそろえて「家族関係は良好だ」と言うのだが、さらに聞いていくと、それは「家族へ円満が一番」といった規範的な意識と裏腹であり、「良好な」家族関係の維持に疲れていたりもする。

家族の成員であるということが、その場その場でその都度達成されるものにすぎないのであれば、家族のあり方を見直す契機が浮上する可能性は小さい。いまだに摂食障害の原因を家族関係に求める議論は後を絶たないが（たとえば、斉藤 [1997]）、事態がこのようなのであるならば、第三者が家族関係に問題を認めることができて、家族がそうした問題を感じ取ることは難しくなるだろう。家族関係がより「よい子」的で同調的なものになってきているのだ。家族原因説に検討を加えたものとしては加藤まどか [1997]、圓田浩二 [2002] を参照。

- (20) この点で小倉千加子が、新専業主婦層はその意図とは裏腹に「自己利益を最優先させることによって、結婚制度を内部から崩壊させる」から支持できると述べていることは興味深い（上野・小倉 [2003:128 頁]）。だが、新専業主婦の戦略が女性間の競争を温存してしまうなら、その効果をそのまま肯定的に受けとめてよいかは検討の余地があるだろう。この点、以下での西山の指摘は示唆的である。西山哲郎「ホモ・ソーシャルな人間関係の陥穽」<http://www.tachibana-u.ac.jp/official/iwhc/essay/essay.html>。
- (21) 類似の構造を取り出したものとしては、吉澤 [1993:207 頁]。面白いことに、こうした状況は須長 [1999] が男性性をめぐって描き出したハゲの構図とよく似ている。須長によれば、ハゲが女性に持てないというのはフィクションであり、むしろハゲで問題になるのは男性同士の関係であるという。つまり、女性とはハゲのイメージを類型化するヴァーチャルな存在にすぎず、この架空の女性の視線を介して「男らしさ」を過剰に意識し競争しあうヴァーチャルな自他関係を立ち上げているのだ。
- (22) 競争が女性の自己認知を希薄化させていくのであれば、それに伴って摂食障害から回復過程でフェミニズムが果たす役割も小さなものとなって行かざるをえないのではないか？ また、だとすれば摂食障害者は減っているのでは

ないかという疑念もないわけではない。臨床経験に基づく推論であるから議論の余地は大きいが、大平健は、拒食症の減少、過食症から鬱病への変遷を指摘している。

- (23) 余談になるが、学生に「自分について思い悩むことはあるか？」とたずねたところ、総じて、男子学生は「悩むこともあるが、めんどくさいし難しいし、すぐに他のことに考えが移ってしまっている」と述べ、女子学生からは「私はこの人にとって何の？」式に具体的な対人関係で「自分って何？」と悩むことはあっても、「そんな風に一般的に悩むことはない」という答えが返ってきた。
- (24) 類似した発想は、樫村 [2003:2章] が取り上げている「純粹集団」の議論に見られる。
- (25) 問題を親子関係に還元するレトリックの分析については、加藤まどか[1997]の議論を参照のこと。だが、問題を内面に解消する治療的な言説を逆手にとって女性の身体の肯定をめざす議論も、主体化のレトリックを採用しているという意味ではこうした問題圏そのものを抜け出しているわけではない。

参考文献

- 浅野千恵、1995、「潜在的商品としての女性身体と摂食障害」江原由美子編『性の商品化』勁草書房。
- 浅野千恵、1996、『女はなぜやせようとするのか』勁草書房。
- 芦川 晋、2004、「身体という檻－自我論的／コミュニケーション論的にみたダイエットあるいは摂食障害－」『中京大学社会学部紀要』(18-1)pp95-126。
- Badinter, Elizabeth, 1980, *L'Amour en plus : Histoire de l'amour maternel, 17-18 siecle*, Flammarion. 鈴木晶訳『母性という神話』ちくま文庫
- Bruck, Hilde, 1978, *The Golden Cage : The Enigma of Anorexia Nervosa*, Harvard U. P. 岡部祥平・溝口純二訳『思春期やせ症の謎－ゴールドデンケージ』星和書店 1979。
- 中公新書ラクレ編集部 (編)、2002、『夫と妻のための新専業主婦論争』中公新書ラ

クレ。

Freedman, Rita, 1986, *Beauty Bound*, Heath and Company. 常田景子訳『美しさという神話』新宿書房 1994。

Giddens, Anthony, 1999, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford U.P.

グループ人魚のくつした、1998、『摂食障害ってなんだろうーそれぞれの見方・生き方ー』三一書房。

平山満紀、2001、「摂食障害と痩せ志向の含意－『人間』の変容－」『情報と社会』（江戸川大学紀要）11、pp.13-25。

磯野真穂、2014、『なぜふつうにたべられねいのかー拒食と過食の文化人類学ー』春秋社

井上輝子・江原由美子編、1995、『女性のデータブック [第2版] ー性・からだから政治参加までー』有斐閣。

金森修、2004、「摂食障害という文化」『思想』（958）pp100-128。

檜村愛子、2003、『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房

加藤秀一、1998、『性現象論－差異とセクシュアリティの社会学－』勁草書房。

加藤まどか、1997、「家族要因説の広がり进行を問う－拒食症・過食症を手がかりとして－」太田省一編著『分析・現代社会』八千代出版 pp.119-154。

加藤まどか、2004、『拒食と過食の社会学－交差する現代社会の規範－』岩波書店

川田文子、2004、「空白時代の思春期症」『神奈川大学評論』47: pp53-59。

香山リカ、2002、『多重化するリアルー心と社会の解離論ー』廣済堂ライブラリー

圓田浩二、2000『「吐く」という社会的行為－摂食障害者へのインタビューから－』『ソシオロジ』（44-3）、pp.67-73。

圓田浩二、2001、「嗜癖としての摂食障害－セルフ・コントロールを強迫する社会－」『現代の社会病理』（16） pp.41-53。

圓田浩二、2002「摂食障害と家族－家族関係が摂食障害者をうみだすのか？－」『現代社会理論研究』（12）pp.196-205。

- 目黒依子・矢沢澄子編 2000 『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社。
- 三井隆宏、2003、『ボディ・セルフファイデンティティ・セクシュアリティの心理学』ナカニシヤ出版
- 宮淑子、1988、『「女」なんていや！—思春期やせ症を追う—』朝日新聞社
- 水島広子、2001、『「やせ願望」の精神病理—摂食障害からのメッセージ—』PHP新書。
- 内藤和美 「ジェンダーの病としての神経性食欲不振症—症状論の整理—」『女性学研究』(2)pp.113-125。
- 中島梓、1995、『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫。
- 中村英代、2011、『摂食障害の語り—〈回復〉の臨床社会学』（新陽社）。
- 野上芳美（編）、1998、『摂食障害』（こころの科学セクション）日本評論社。
- 荻野美穂、2002、『ジェンダー化する身体』勁草書房。
- 小倉孝誠、1999、『〈女らしさ〉はどう作られたのか』法蔵館
- 小倉千加子、2001 『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書。
- 小倉千加子、2003、『結婚の条件』朝日新聞社。
- 岡野八代、2001、『リベラリズムの困難からフェミニズムへ』江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム—フェミニズムの主張 5—』勁草書房
- 大平健、1996、『拒食の喜び、媚態の憂うつ—イメージ崇拜時代の食と性—』（21世紀問題文ブックス 14）岩波書店。
- 大平健、2003、『食の精神病理』 光文社新書。
- Orback, Susie, 1986, *Hunger Strike: The Anorexic's Struggle as a Metaphor for Our Age*, Norton & Com. 鈴木二郎・天野裕子・黒川由紀子・林百合訳『拒食症』新曜社 1992。
- Russett, Cynthia Eagle, 1989, *Sexual Science*, Harvard U. P. 上野直子訳『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』工作舎
- 斉藤美奈子、2002、『モダンガール論—女の子には出世の道が二つある—』マガジンハウス。
- 斉藤学、1997、『家族の中の心の病—「よい子」たちの過食と拒食—』講談社+α

文庫

Salzman, Leon, *The Obsessive Personality: Origins, Dynamics and Therapy*,

Jason Aronson. 成田善弘・笠原嘉訳『強迫パーソナリティ』みすず書房
1985。

下坂幸三、1999、『拒食と過食の心理－治療者のまなざし－』岩波書店。

須長史生、1999、『ハゲを生きる－外見と男らしさの社会学－』勁草書房。

富澤治、2011、『裏切りの身体－「摂食障害」という出口－』MC ミューズ新書

Vandereycken, Wander & van Deth, Ron, 1994, *From Fasting Saints to
Anorexic Girls: The History of Self-Starvation*, 野上芳美訳『拒食の文
化史』青土社 1997。

上野千鶴子・小倉千加子、2002『ザ・フェミニズム』筑摩書房。

Wolf, Naomi, 1991, *The Beauty Myth*, John Brockman Associates. 曾田和子訳
『美の陰謀－女たちの見えない敵－』TBS プリタニカ 1994。

山田昌弘、1996、『結婚の社会学－未婚化・晩婚化はつづくのか－』丸善ライブラ
リー。

山登敬之、1988、『拒食症と過食症－困惑するアリスたち－』講談社現代新書。

吉野ヒロ子、1997、『「激やせ」という病－女性週刊誌における「やせること」－』『年
報社会学論集』（10） pp205-214。

吉澤夏子、1993、『フェミニズムの困難－どのような社会が平等な社会か－』勁草書
房。

吉澤夏子、1997、『女であることの希望－ラディカル・フェミニズムの向こう側－』
勁草書房。

『＜摂食障害／過食＞論文集』（『精神科治療学』選定論文集）星和書店 1998

Current Sociology